

◇講演◇

母なる大地を求めて

周 郷 博



はじめに

ぼくは、世の中からちょっと孤立してみたい気持がって、あそこへ行つたんだけれど……このごろはいろんな人が来てくれる。もうしおがないから公開することにしました、誰でも来るなさい……と。このごろは泊まれるように二階を作りました。

引込んでいるということは、世の中から隠れている、というこ^トではなくて、引込んでいるからこそ、世の中がどういうふうに動いているのかということについて敏感になつていま^sす。今週はメキシコのマリア・ベナビデスさんが中国へ行つた帰りに、マルタさんという友だちと訪ねてきました。その前の前日にはヨハネスというなくなつた服部たか子さんのご主人と、たか子さんのお母さんが来て夜まで話しました。孤立してゐるようだけれど、アメリカから招待が来たり、あそこにもぐり込んでいるわけではな^いのです。

考えれば考えるほど、教育とい^うのは難しいものですから、世界中がいま、"病める教育"などといつて、いいかげんなことをいうのは罪をおかすことじやないかな、と思ひます。なかなかわからないことに対する、忠告めいたことをいうことは、罪をおかすことではないのか、一時的に、自分は何が良心的に考へてゐる

ありをして、生半可なことをしようと……これはだましているのではないか、そんなこといいながらぼくは、本出したりして、何かいうつもりらしいね。（笑い）

本当に子どもを愛するということ

最初に、こうすることをいつてみたいんですけれども……。

それは、家へ来たマリアさんと話したことや、ヨハネスさんが興奮して死んだたか子さんの妹の子ども（一歳三ヶ月）に対する日本のお父さんやお母さんの態度について非常に強く、"あれは愛ではない"といつたりしたことがあるので、それから説明します。

日本のお父さん、その人は東大を出てるんですけどね。その人は、家へ帰つてると、一歳三ヶ月の子を高い高いなんかして：いいお父さんには違ひないけれど、あんなふうに子どもを興奮させて、そして子どもが喜べばいい、という考え方で、ドイツ人として育つたヨハネスは疑問を持つわけです。その一つのことだけを考えても、"子どもが喜ぶからいい"、玩具なんかでも、まだ一歳三ヶ月なのに機械でなんか動く玩具をたくさん与えていると、いうことに疑問をもつというより腹を立てているんです。そういうふうでは、子どもの体と心が育つていいかない。刺激にまつ

て、刺激に溺れるだけで終わってしまうじゃないか、つまり創造的にならないというんです。ところが日本では、そういうことをいうと、たとえばその東大出のお父さんに、憎まれちゃうんです。

これを皆さんはどう思いますか？ 何でもないことのようですが、幼稚園でも、"子どもが喜べばいい"というやり方をしていませんか？ それは、ヨハネスがいつたように、大人たちが子どもに示すべき"本当の愛"じやないんだ、ということをいいたいと思います。そして、そういう間違いを、ぼくたちはやつてゐるのではないか、ということを考えてみようではありませんか。テレビの子ども番組なんかも、日本のは本当に低級ですね。人寄せ、ちょっとうまいことをやつていて、というだけで、中味からいえば非常に低級です。

前にぼくが園長をしていた時、ドイツの教師が訪ねて来ました。その人が、幼稚園の部屋を見て、"玩具が多すぎる"といいました。ところが外国人だから、失礼なことはいいません。あのね、外国人にほめられたからっていい気になっちゃいけないの。外国人は礼儀を知つているから、じかには悪くいわないだけです。だから、ちょっとでも批判されたら、それをこつちで解釈して、あ、この人が考えているのはこういうことだ、というふうに

考るべきです。その時、そのドイツの若い教師は、"私の国では、赤や緑のあくどい色を使ったプラスチックの玩具は一つもありません"といいました。しかし、遠慮がちにいつたこの言葉は、きつい言葉ですよ。そのきつさを感じないとしたら、日本人是非常に感覚が鈍っている。反省力がないということです。一つ

の言葉から、自分たちがやっていることは何であるかということを感じる心が薄くなっているんだと思います。

それから、もう一つ付け加えると、ヨハネスの話ですが、お父さんが帰ってきて子どもを必要以上にかまうといいました。しかしそれはね、昔は子どもが多かったからそんなことはできなかつたの。ヨハネスはね、大人がそんなことばかりやつてると、子どもが早く大人びちゃう、不完全な大人になっちゃうといふんです。子どもは、子どもの世界があるわけです。それを大人の世界が侵略してゐるんです。やはり二つの世界があると考えるべきです。子どもには子どもの世界があり、大人には大人の世界があり、これは協力していかなければならぬ。大人が子どものようになって子どもの世界に溺れ込んでいくのもいけないです。子どもの方も、大人にチャホヤされて早く大人になっちゃうのもいけないです。二つの世界があつて、大人はだんだん死んでいくわけですから、そのあとをつぐといつても、また違う問題があ

るわけです、次の時代には、やはりそれを発展させていくように、だんだん時の流れと一緒に子どもの世界が成長して行って新しい問題を解明していき、創造的に生きるというふうになつたらいいと思います。

中国のこと——マリアさんの話から——

ぼくがこんなふうに考えていたら、次の日にまたマリアさんが来ました。ぼくはあそこでびつこの山羊と一緒にいますが、何でいのか、比較教育というのが、ドイツの人の考え方、メキシコの人の考え方と、日本のやり方をくらべて見ているような気がします。本の上の比較教育より、もっとおもしろいと思います。

マリアさんといろいろな話をしましたが、中国は、ただ普通の、見て歩くというお客様を外国から入れないということでした。が、メキシコからの十四人は初めてそういう形で中国へ行つたのだそうです。それで、マリアさんが中国をどう見て來たかという話の中で、ぼくは一番日本の教育の間抜け工合、赤ちゃんの世界でも、幼稚教育のことでも、何か大人の自己満足で行なわれているように感じました。ぼくが幼稚園の先生たちを前にしてこういうことをいうのは非常に失礼なことですよ。教育の悪口を教師に向かっていうことは、牧師に"神様はこの教会にいない

じやないか” というのと同じで大変勇気がいることです。

マリアさんは、行く前から中国はいやだといってました。行ってみたら、どこへ行つても通訳がつくれども、早口で、向こう

の人が説明するだけで、うるさくて、きらいだとといいました。

中国の人は、毛沢東も、人民もみな同じように働いています。差別がないんです。男も女も差別がありません。全部集団の生活です。それはいいこと……だといってました。そして暮し向ぎはたしかによくなつたと、どこでもいっているわけです。しかし、どこへ行つても“中国は世界で一番いい” というのだそうです。“私たちの国は外国から何も与るものはない” というのだそうですが、でも通訳するのはスペイン語じゃないか、このスペイン語はどこから来たのかと思ったそうです。ともかく、中華思想っていうのはもともとそういうのらしいけれど、中国っていうものは最善だというふうに、毛沢東や周恩来がいっているのじやなくて……地方へ行けばそうだと思います。マリアさんはそういうところがいやだというんです。うんと意地悪く考へると、全体主義、キリスト教國でなくて神様はいないですから、毛沢東が神様なんです。ぼくは、マリアさんとはちよつと違つて、今日日本には、明治天皇みたいな、もっと偉い人がいてくれたらいいなと思うんです。神様みたいに……。日本には神様がいない!?

(このあと中国の教育について話されました。九月号のマリアさんの話と重複するところもありますので省略いたします。)

マリアさんは、日本へ来る前に犬にかまれたんです。そして右の手首がちょっと動かなくなつたので、中国の病院へ行つたついでに、それを見せて“ハリでおらないか” といったそうです。すると女の医師がそれを見て、五分ぐらい見ただけでおらないといったんだそうです。そしたらその日の夜の十一時ごろ、通訳の人気がきて“あなたは病氣だからすぐ入院しなさい、それではなければすぐメキシコへ帰りなさい” といったそうです。昼間に五分間、マリアさんの眼を見ただけでその女医さんは、マリアさんが病氣だとわかつたというんだそうです。マリアさんはいろいろ変な想像をして、危険を感じちゃつた? のね。もしついて行つたら切りきざまれて食べられちゃうかもしれないと思つたといました。それは善意に解釈すれば、疲れていたようなのでそれを治してくれようとしたのかもしれないと思ひますけれどもね。しかしマリアさんは、そうは思わなかつたらしいです。何しろ中国は恐いと思った。それでもなおかつ、中国の自然はとても美しい、そして日本にくらべて公害がないといいました。またそういう中国のいやな面も見た上で、教育のいい点も見いだし

た good thing だ、とマリアさんはいました。何でもないようだけれど、本で読むより実感があつて、中国と日本とメキシコをくらべてる感じです。

そして日本は、われわれの食べもの、着てるのは、世界との関係がちょっとでも切れたら、明日から醤油が使えない。納豆が食べられないというように、それほど世界にまきこまれていません。世界の中の日本、としてわれわれの将来の進路を考えることが絶対必要です。日本がいいんだといい氣にならずに、比較が必要です。そして、日本のどこが狭い考え方で、どこが改められなきやならないかを考えるべきです。改めるといつても外国の真似をするのと違つて、日本人が本来もつていたものをこわしてしまってはだめで、日本のもつている potential な能力として、どうを育てていくかという改め方が必要です。

ヨハネスやマリアさんが玩具を与えすぎると、いつたことと同じ

ワアワアいつてれば子どもは喜ぶからいいだらう、なんていうのは間違います。ということは玩具を取り上げればいいということではなく、その子にふさわしいものを与えようということです。それがふさわしいかと考えなければいけません。学校だって、教えるなくないといふんじやないんです。教えることを減らそうといふこと、それから中国のように、学校に入っている年数を短縮するということを、日本人はほとんど考えていませんね。教えることをもつと集約的に、無駄をふき、簡潔にすることが大事です。それは玩具の場合と同じです。本当の玩具を与えてないと同じに、本当に教えなければならないことを教えていないんです。玩具なんかまだいいけれど、数学なんかやたらにたくさんあるといやになっちゃうだらうと思ひます。

悩むことの必要

ぼくは今、二つのことをあなた方にいたわけですが、こんなふうに、教育は年限が長ければいいといふことではないと思います。中国は教育を短縮するといつてはいますが、日本でも教えることをもつと減らそうということがずいぶん問題になつてますね。しかしそれは、教育の程度を下げるということじゃないんです。玩具と学科目と同じようなものだと思つんだけれども、一歳三ヶ月の子どもに刺激的な玩具をたくさん与えて、ガアガア

になつています。第二次世界大戦で大きな打撃をうけて、そのあ

といふらかの人は立ち直りましたが、今度は突然また経済的にダメになつたら案外人間は立ち直るかもしません。でも突然そういう目にあうということは悪い方へ立ち直る危険もあるわけです。ですからあまりダメになる前から考えておいた方がいいんです。考えるということは、世界中が未来がないという今の状態（人口問題、公害問題、原水爆など）で一番重要なのは“人間”といふものなのです。したがつて、世界中が教育をどういうふうにしたらいいかということが最大の問題なのです。石油、経済、政治などの問題と一体のものにして、スエーデンの伝説の中に出でくるような“未来にかける虹の橋”をどういふうにかけるか、（この虹っていうのはやはり聖書から来ています）世界中が物質的なものではなく、精神的な未来を、今は求めている時代だと思います。

ぼくは畠でいろいろ作っていますが、昨日梁瀬さんていう人が

テレビでキャベツの話で出ていましたが、ぼくのキャベツは梁瀬さんのキャベツと同じんですよ。やおやのキャベツはだめなの、あれ食べると骨がみんな変になっちゃうの。梁瀬さんのキャベツはいいんです。この人は本当はお医者さんなんだけれど、患者さんを見ていると食べている野菜なんかから病気がきているということがわかつて百姓に変わっちゃつたの。何か、有吉佐和

子さんの『複合汚染』に出てくる人だそうですね。

キャベツは、去年から育てたのが今、だんだん大きくなつてくるころです。見ると、人間にもひねくれてる人間があるけれど、ひねくれたやつはキャベツでもだめなの。味もよくないし堅いんです。よくまいてつやつやしているのがいいんです。近所の人上げたら、今までキャベツを食べなかつた三歳ぐらいの子どもが“周郷さんのキャベツ、もつとほしい”つていうようになつたんだって、（笑い）何もつけなくとも甘いの。梁瀬さんのキャベツと同じです。この間もぼくが畠にいたら、近所の子どもたちがきて“周郷さんの、バケツ（キャベツのこと）ちよだい！”っていふんだ。（笑い）そのくらいおいしいのだと思つて、ぼくは非常にうれしく思いました。

見わかる力と持久力

今、休みの間に坂田信子さんにいろいろと中国人の話をききましたが、マリアさんが中国人の親切を気味悪く思つたということの本当のことはわかりませんが、恐らくマリアさんが思つたのとは違う親切であつたのだと思います。本当にいい親切を、気持ちが悪く思うこともありますね。うわづらだけの親切でばかに気持ちがよくなつちゃうこともあります。これはだまされたんで

す。だから、勉強する場合も、何が本当によくて、何がいけないのかということを見きわめることが大切です。教育のことなんかでも、何がよくて何が悪いのかを見わけるというのは、非常に微妙ですね。

梁瀬さんも、農薬や化学肥料で有機質じやないもので育てられたものを食べると、病気にかかりやすくなつて骨が弱くなつて、持久力のない人間になる、といい、もうそういう状態になつちやつてます。見わかる力と持久力、これは非常に難しいことですが、これがかけてるんですね。節操がなく、一貫したものがない。それでは何かやりとげるという喜びがないもんだから顔がだんだんひどくなるんです。梁瀬さんも、顔見ただけであなたはこういう野菜を食べる、ってわかるそうです。ぼくもそんな気がします。われわれの心の食べ物もね、変なものばかり食べてる」と、顔見ただけでわかるようになっちゃうんじゃないかな。

今日は本当は違う話をするつもりで来たんですけど（笑い）

もう少し梁瀬さんの話をします。

豚なんかでもね、豚の食べるようを作られた、つまり汚染されたものとそうでないものを見わけるそうです。外へ出ると牧草を

食べないで、雑草を食べるんだそうです。ぼくの家の山羊もそうですけどね。動物はちゃんと鼻でかぎわけるんです。日本人みた

いに、テレビを見て“あれを食おう”なんていうことはしませ

ん。（笑い）日本人は鼻がきかなくなつたんだな。家畜、チャボなんているのは何でも食べちゃいますけれど、人間は今や家畜化されているんです。人間は、家畜化されればされるほど、判別ができなくなるんです。判別ということは非常に大事ですね。そういう意味では、イギリスの“裸のさる”を書いた人が次に書いた“人間動物園”とか、安部公房の書いたもの（箱の中）にも人間が動物園の動物のようにおりに入れられた状態が出てきます。サン・テ・グジュペリもそういうふうに考えていました。“人間がもう海も何もない、都市の中で、人間は生活を失つている”といつています。人間が家畜化されているというのはたしかです。そして判別力がなくなり持久力がなくなり、食物が変になります。教育も変になつてしまします。だからぼくは、動物から学ぶことが非常にあるよう思います。植物から学ぶこともたくさんあります。生命というものの原型なんですから……。人間はその延長線の上で考えるようになったんです。

母なる大地“を作る

次にいおうと思っているのはちょっと夢のような話です。

畠をやつてますとね、自然の季節も昔と違つて春になつても春

らしくもなく、春風が吹いてきたという喜びもなくて、じくじくしていの内に初夏みたいなものになつてきました。作物の育ち方もおかしくなります。作物のはじめつていうものは何か弱いものです。最初、下に根がはつてそして上に出てきます。それがあるところまでいくと、いやに自信のある姿になるのとだめになつてしまふものができます。それが今年はみんなだめになつちゃうんです。堆肥がよくないせいもあるけれど……。公害のために、農薬のために大地が死んじやつた、ということはよくいわれますね。ぼくの畠の大地も死んでるかもしれないで、これを生きてる大地にしたいと思つてやってきました。草刈りしたり堆肥を入れたり……これは時間がかかります。梁瀬さんのテレビを見てましたら、植物っていうのは、すぐに地面に埋めたらいけないんだそうです。地面の上に暫くおいでいる内に、バクテリアの働きで土に帰つていくわけです。まだ生のものを入れちゃうとガスを出します。腐つていく前に、そして作物の根をいためちゃうんですね。出てきたばかりの根つていうのは白くて細くて、しかも上から見たものより数が多い。それがしつかりすると根が張つてくるわけですが、それがこわれちゃうと上がだめになっちゃいます。

突然結論に行くみたいですが、大地は新鮮でなくちゃいけな

い、と考えました。肥料は必要です。しかし間に合わせみたいに、肥料と称して不淨なよごれたものを入れちゃつてることが多いわけです。堆肥は下手に作ると虫も育ちますから、ちゃんと大地にかえりません。ちょっと教育に似てます。肥料をやつた方が育つだらうと思うわけです。肥料をやらなきゃいけない。堆肥を作らなきゃいけない、大地が生きてこなければいけない。生命を育てる、母なる大地というものになつていかなければいけない。これは大変なことです。ぼくも一生懸命堆肥をひっくり返したりしてますけれどね、そうしている内に、肥料分は必要だけれど、土壤はもつと複雑なんです。すき間、中に空気がなければいけないし、固まつて部分も必要なんです。固いところに根を張つていくのも根のはり、あいです。この間も温室の親父さんと話をしましたが、"長いこと百姓をやつているが、近ごろやつと気がついた。大地は新鮮!!神聖でなければいけない、変なごみが入つてたらいけない"といつてました。下手な肥料をやつたらダメで、肥料は大地と完全にとけ合つて、自然な状態で土に戻つてなきゃいけないのだとぼくも思いました。しかも少し大きくなつた作物や、オクラのように凶々しい作物だと(笑い)いいんですけど、初期の、一番弱い時には虫がつきやすいんです。人間だって、やる気のない、勉強する気(ぼくは勉強という言葉は好きじ

やないけれど) のない、生きる気のない人がいっぱいいると、そこに早く虫がつくんじゃないかな。そして健康な人までむしばまれていくんじゃないかな。ということがあわせて考えますけれど、やはり中心になることは、大地は新鮮に、母なる大地、生命を育てる大地でなければいけない。特に初期は、まじり物が多くつたり、間に合わせ、人間でいえば間に合わせ知識なんかをもつた、不自然なお母さんじやだめだ、ということです。大地と肥料はまじり合って、肥料などと見分けがつかないような、自然な母でなければいけない。聖母マリアは、こういうことの象徴で、ヨーロッパ人がえがき出したものではないかな、と思います。

母親は、殊に子どもが宿つてから四、五年までは、清潔で natural でなければいけない。モンテッソーリがいつたような、母といいうもののもつている特殊な本能といいうものと完全にまじり合つた知識ならないと思いますが、何か、欲と一緒になつたような、生半可^{なまはんか}な知識は、根をおかず肥料のようなものです。

というようなことを、温室の親父さんと話しながら、土地、土壤の review ということについて考えました。昔は知らないでこういうことをやることができたのです。今はいろいろなものがあるから、それで早く作らなきゃということで、変なものにしてしまいます。それでも（化学肥料でも）育つものはあります、今、

度はそれを食べた人の顔がおかしくなることがあります。これは大急ぎで結論を出したみたいですが、そんなに間違つていないと思います。

ちょっと横道にそれるようですが、この間鎌倉へ行って喫茶店でそれとなくよその人の話を聞きました。話によると、その人はぼくの先輩、旧一高を出て東大の印度哲学を出た八十いくつかの人でした。その話がとてもおもしろくて、名前を聞きたいくらいでした。その話のひとつに、子どもを生むということに、本当に苦しんだ母の方が母親らしくなるということがありました。さつきも話したように、母親は母親らしく自然に運命をうけ入れて清潔で、そして生むために苦しむという、また生んだあとも、母親らしい清潔な心で苦しめば苦しむほど、母から子どもへ自力といいうものが伝わる。この自力といいうのは普通に使われているのであって、それはその人の一生を支配するものだと考えられます。あとになれば他力が入ってきますから……。

逆からいえば、今のように妊娠が簡単にできる。そうすると母の苦しみはないわけです。そして教育といふことも、自力を育てるようなやり方になつていません。ぼくの友人である東山魁夷さん、あの人のお母さんは必ずい分お父さんのことで苦しんだ人です。でもじっと耐えた人でした。だからこそ東山さんのああいう

画ができたのだと思ひます。何か教育のようですが、教育におきかえてみてもそれほど間違つてないと思ひます。

(このあと、今日のテーマは実は「幼稚園の行事」であると司会者の方から説明がありました)

幼稚園の行事について

幼稚園の行事、特に運動会なんていうのは、……ぼくも園長の時、しようがないから子どもがずっとするようなことをいおうと思つたりしましたけどね。もし、行事というものが意味をもつならば、戦後の日本の行事ではなくて、もう少し日本の国土にあつた、伝統的なものをとりあげたらしいのではないかと思ひます。伝統的なもの、それりやあ三月の節供ならいいかといつても、あんまりワアワアいつて……そういうことはかえってお節供にあわないんじゃないかと思います。先生の方からいえば、お節供でもやれば、何かやつたように見えるからかもしれません、そういうふうじやいけないと思ひます。

幼稚園の行事だって時代が変わってきたんだから（ぼくはつにやりましたが）山へ行って三日泊つて一緒に暮したんです。だんだんそれが一つの伝統になり、先生の方も子どもの方もいつのまにか、一つの流れを感じるようになつたらしいと思ひます。

先生の方もやるうとしているんですから……。意義がある、と思つてやつてきますから。今、幼稚園でやつてある行事は、意義があると思ってやつてるんじゃないでしょ。“お誕生会”ここのお誕生会、いやらしいのよ。（笑い）暗いところで先生たちが何かして、ぼくもだけれど、お母さんなんかいねむりします。ということは、やつてる人たちが、手段として間に合わせにやつてゐるか、意義を感じているかどうかということです。運動会はやることになつてゐるからやる、やらなきやならないからやる。ぼくはあんな小さい子たちが一生けん命走らされたりしているのを見ると、かわいそうになることがあります。あんな小さい子を、大人の手段にしたらいけないんです。小さな子がリレーの棒かなんかもつて一生けん命になる。まるでネズミ競走かなんかみたいに（笑い）……ああいうことはやらない方がいいな。

やっぱり行事つていうのは、大きさにやるもんじやないと思います。ぼくが子どものころを考えると、天神さまの森で、子どもだけでやりました。ほんの小さなグループで。その町だけは、大人们ちが子どもやることをつべこべいわずに、子どもにまかしてくれました。そういう行事の方がいいんじやないかな。行事について、といわれてもほかにはあんまりいうことないと思ひます。ぼくがここの中長をやつた時の経験で、『お誕生会』のつまら

なさ、先生たちの変な芝居なんか見ちゃおれない。(笑い) 大人の軽薄さを見せるだけで、あまり子どものためになりません。

子どもっていうのは山羊やほかの動物と同じに、大人の心をパッと見て、"あれはうそだな"つてすぐわかるんです。子どもはつきあって時には笑つたりしますが、実は何も信じてないんです。

やるんなら、よくよく吟味して、考えたもの(人間だけでなく、自然との関係がはいって「生態学的」な側面と一つになったもの)をやるべきで、玩具と同じに、やりすぎるのはよくありません。子どもにやたらに軽薄なものを与えるのは……。テレビなんかでもたまにやる真面目な子ども向けの番組はいいです。たま

にしかありませんが、やってる大人も一生けん命です。ぼくら子どもたちの祭は楽しかった。その時に大人がひょっこなんて踊つてると、大人は一生けん命ですよ。そうすると子どもの方も信じて見てました。今、もうそういうのはなくなりましたが、そ

ういう時に大人の浪花節なんかありました。そうすると、大人が一生けん命だから、子ども心にも何となく浪花節がわからりました。今のは全部子ども向けなんです。なぜそうするのでしょうか? ふだん一生けん命保育していないからですか? 気に入るから子どもをだまそうとしてやるのでしようか。"やるんな、大人が一生けん命やりなさい"とぼくはいいたいんです。大人が

一生けん命かどうかを子どもは感じてるし、子どもも喜ぶんです。

幼稚園は子どもにサービスするだけでなく、こういう世の中ですから、お母さんたちが日常生活で、美醜が本当にわかるとか趣味を広げるとかして、お母さんたちが参加する場でなきやいけないんです。幼稚園はお母さんの教育も考えなきやいけないと思ってぼくは園長としてやってきたのです。

(五月二十四日にお茶の水女子大学附属幼稚園講堂で行われた「みどり会」主催の講演を収録したもの)

